

透視（PENETRATION）

創造のエネルギー

『太陽』……新しい何かを生み出すため、私たちが利用できるただ一つのエネルギーである。物理化学的に利用可能なエネルギーや資源は、すべて太陽がもたらしたものである。そして、私たちの『脳』が創造性を發揮するときもまた、エネルギー源は『太陽』なのである。それにも関わらず今までの建築、都市は『太陽』という制御困難な対象をできる限り隔離し、安定期に集積した環境をつくることだけを目指して造られてきた。そんな錯覚を繰り返してきた結果、東京、そして地球は、その「持続可能性」を失ってしまった。

今こそ『隔離（Isolation）』という既存のパラダイムから脱却した、新しいコンセプトが必要である。2050年、2100年……ずっと続く未来において、私たちの暮らしが持続可能であり続けるためには、ここで東京で私たち自身が新しい価値を生み出していくなければならない。未来をつくる創造性を育み、持続可能な地球・社会の基盤となる建築モデルのコンセプトとして、私たちは「透視（Penetration）」を提案する。『太陽』のエネルギーを、建築の奥深くへと、脳の奥深くへと。

ISOLATION

PENETRATION

4つのモード モードチェンジ

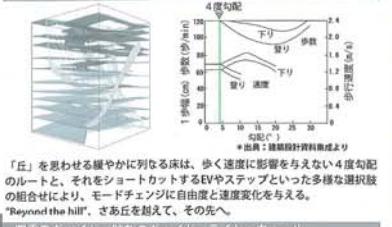
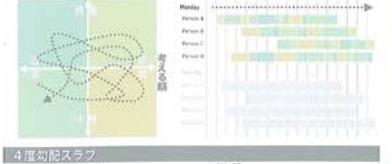
『感じる脳』の《興奮-沈静》を経軸に、『考える脳』の《拡散-収束》を横軸にとることで、脳の多様な状態をマッピングできる。脳活動を記述するのに平面に領域化された4象限こそが、創造的活動の4つのモードである。

提案する建築モデル“Penetration Cube”は、この創造的活動の4つのモードを増幅し、モード間のスムーズな移行を促す。制御困難な『太陽（自然）』がもつムラは、和らげられたり、強められたりしながら、建築の奥深くへと浸透する。用意された多様な場において、予測不能なムラを五感への刺激として受容した脳は、さまざまな部位を賦活させる。その広範囲な発火のネットワーク連鎖していくことにより、新しい何かが創発される。

そして、ダイナミックに変化する一人一人のモードは、時に重なり、時に衝突しながら、個人として、集団としての創造性が極限まで高められていく。

自然のムラをそのまま活かし、創造のエネルギーへ変換するこの建築モデルは、人と環境とが共生する未来世界において、普遍の建築原理となるであろう。

脳の筋

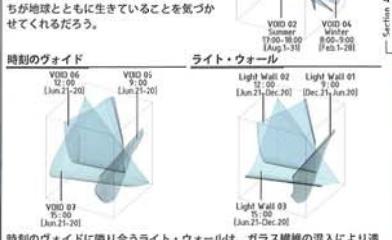


時刻のワイド

移ろい行く自然を建築の奥深くへと採り込み、室内空間の多様性を拡張するため、季節・時刻の太陽座標からそれぞれのワイド形状を導出する。

冬の朝陽、夏の夕暮れ、そして春や秋の日差しを味わう「四季のワイド」は、私たちが地球とともに生きていることを気づかてくれるだろう。

ライト・ウォール



グリーンウォール



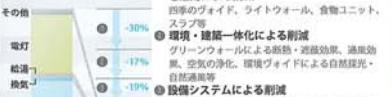
グリーンウォール



グリーンウォール



グリーンウォール



グリーンウォール

2009年ベース 2050年提案

PENETRATION CUBE

自然の多様性を浸透させる知的創造オフィス



4つのモード

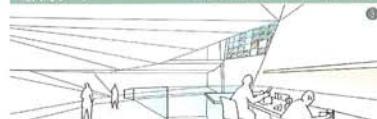
フレスト



『からぎ』と呼ばれる時空間の周辺教室を含む複数の窓を設けることによって、建物の視界だけでなく、前頭前野、大脳辺縁系など感情や感覚や感情に關注するさまざまな部位が賦活される。広範囲に亘る脳の活性化によって、クリエイターの脳は一心不乱に新たな形態の創出へと向かっていく。



『からぎ』という複数窓は、視覚だけでなく、大脳辺縁系の複数種と中前頭回とを強く賦活させる。空間開拓のワーキングスペースを司る中前頭回と、自己認識をコントロールする皮質核の活性化により、クリエイターの脳は一心不乱に新たな形態の創出へと向かっていく。



ただ一つのことじっと凝視するためには、適度に変化する刺激に囲まれることが必要である。「自然のからぎ」などの視覚刺激が、大脳全体の脳血流のバランスを整えることで、前頭前野の持続的な酸素消費が抑制され、高いレベルの集中が長時間にわたって維持されている。



喉寛は、脳の辺縁部分である大脳辺縁系と深く結びついた垂体腺であり、喉寛への刺激は情動や認知などを強く影響を与える。喉寛刺激により大脳辺縁系を活性化させると同時に、大脳新皮質における脳血流を増大させ、広範囲で高次の認知や思考が活性化する。



モードチェンジ

スイッチON

自然のリズムに応じた刺激を環境から受取ることにより、サーフィンアリズムを整え、心身の健康を維持することが可能である。朝晴を浴びることはOFF（休息）からON（活動）へのリズムの切り替えに不可欠であり、日中の交替時間帯の活動を有効に活用することができる。



モード・シフト

スイッチOFF

五感の刺激レベルを大幅に変動させながら、全体として揚げ・減らしていくことで、既往譲下で大脳辺縁系の活動を変容させることが可能である。上下移動やスピーディ増強など空間内の行動そのものを変えて、自然がもつ瞬間の変動を増幅させることで、短時間でのモードシフトを達成する。



部活動部位を時間的に活性化させることは、いわゆる『低炭酸化』としてその効果が知られている。脳をどこへ向けて運動するかによってストレスを受けた筋肉に対して、「歩くこと」へのレスポンス刺激を強めた筋路を歩行させることで、運動に分派されたカルチゾールの減少を有意に抑制できる。



ポジティブフィードバック